

# 人と社会の活性化を促すアート・デザインについて6

## —医療施設におけるパブリックアートの4事例—

下山 肇

### 1. はじめに

本制作研究報告は筆者が対外的なデザインとして実施した4つの医療施設へのパブリックアートデザインの事例報告である。筆者の経験では長らく続いたバブル崩壊以降の景気低迷で、公共空間<sup>1</sup>におけるアートの需要は目に見えて減ってきていたが、近年、景気の安定とともにその需要は少しずつ増えてきているように感じられる。特にその実施場所は以前のような、ホテルや公園、交通機関より、医療現場への提案が目立つようになってきた。それぞれの計画規模に大小はあるが、医療施設に対して行われた4事例を通して、様々な事情を持った医療施設の環境とアートの関係について報告する。

環境芸術学会第15回大会（2014年）での口頭発表、『先端医療施設内オブジェのデザイン～利用者とともに10年かけて完成する「コト」のデザイン』を元に、医療施設におけるパブリックアートの事例という観点で、環境芸術学会誌「環境芸術」へ掲載した、『K病院エントランスレリーフ』15-2号 p.12、13（2016年）、環境芸術学会第18回大会（2017年）での作品発表『かげのいろ／The colors of the shadow』について修正、加筆し、さらに新たな事例を加えてまとめたものである。

### 2. 医療施設というアート設置環境について

一般的にオーナーはどのようなものにお金を掛けるのかということを考えてみると、まずは日常をよりよくするために具体的な成果がわかりやすいものとして、ある機能を伴った「利便性」が得られるものに対してであろう。またもう一方では、所有することによるステータスとして、「資産価値や権威」が得られるものが考えられる（Fig.1）。アートはここに位置付けられることがほとんどで、こちらは「利便性」とは正反対の位置にあり「余裕」と言われてしまうこともある（Fig.2）。そしてその対象となるものは名の知れた作家の作品や、オークションで高額取引されるなど、すでに価値の保証がされているものが大多数である。

今回のテーマである医療施設の環境について考えてみると、この「利便性」を突き詰めた先にある「生死」に関わる場所であり、一般的にはもっともアートから縁遠く、費用を割くということとは考えにくい設置環境といえる（Fig.3）。また「資産価値や権威」の対象にならない筆者の立

場への発注があるということは、オーナーにそれ以外の必然性があるということである。

### 3. アート設置の現状と1パーセントフォーアート

アートを必要とするオーナーとそれを具体化するデザイナーや作家が直接結びつくことは稀である。そのため両者の間をつなぐ役割としてアートプロデューサーの存在が重要となる。彼らはオーナーの要望や条件を聞き、デザイナーや作家と協力して計画を企画、立案し、具現化していく。

日本では様々な理由によって公共空間へのアート導入が行われているが法規的な縛りはなく、その采配は概ね発注元のオーナーに委ねられている。筆者の経験ではアートの設置は大抵総工事の最終段階で行われるため、たとえ計画当初から予算が確保され契約が済んでいても、その後の工事で規模が縮小されたり、悪くすると中止されたりすることも多々起こる。このような現場ではアート設置の意味があまり重要視されず、設備や構造、その他のそれがないと成り立たないと思われている「利便性」の部分に対して予算がさかれる。このように多くの現場ではアートは二の次で、あってもなくてもその後に影響が少ないと考えられているのが現状である。

一方、世界では「1パーセントフォーアート」(「フォーパーセントアート」「パーセントプログラム」とも呼ばれる)という活動があり、日本でこの法制化を推進している公益財団法人日本交通文化協会によれば、「公共建築の建設費の1%を、その建築物に関連・付随する芸術・アートのために支出しようという考えです。欧米では戦後早い時期に、公共建築の建設費の1%をその建物に関連・付随する芸術やアートに割く法律が成立<sup>2</sup>」しているという。

このようなアート導入に対する積極的な動きもあるが、現時点での日本ではアートが「余裕」と位置付けられている限り、具現化までの道は険しい。たとえアートプロデューサーやデザイナー、作家がどんなに良い提案をし、それが承諾されていたとしても、最終的にアートが残るためにはオーナーに余程の意識や利便性を超えた必然性がないかぎり危ういものとなってくる。また、オーナーが独断で決定できないことも多く、自分以外の他者から共感が得やすい「設置の理由」を用意することもまた重要なことである。

以下、そのような厳しい状況を掻い潜り計画が実施された4つの事例、『成長するモニュメント「思いの木」と変化するレリーフ1』、『変化するレリーフ2』、『土地の特徴を生かすレリーフ』、『実体感を消すレリーフ』について紹介する。

## 4. 事例1『成長するモニュメント「思いの木」(Fig.4)と変化するレリーフ1』

### 4.1. 概要

神戸市ポートアイランドに新設された先端医療施設でのモニュメント、レリーフのデザインプロジェクトである。設置場所は施設エントランスを入ってから受付を経て、建物左側へと進むと行き当たる来院者の滞在スペースである。

この施設では肝臓病及び消化器病に対する高度な先端医療サービスを提供するため、利用者や医療従事者たちの置かれる環境は重苦しくなりがちである。この施設を少しでも明るくし、病気

を克服しようという利用者の「決意」と、その手助けをする医療従事者の「初心」を表すモニュメントとしての役割をアート・デザインが担った。具体的なデザイン計画は当初、『成長するモニュメント』のみであった。しかし後述するクライアントの強い意志と必要性によって計画が膨らみ、モニュメント近くの壁面への『変化するレリーフ』の設置計画が付加された。また本計画後の次世代デザインとして『成長するモニュメント』を中心とした、天井や他の壁面まで広がる空間デザインプロジェクトを構想するまでに至った。オーナーにとってこのモニュメントの存在は大きく、『思いの木』という作品タイトルもオーナーが名付けたものである。

しかしモニュメントとレリーフは実現したものの空間デザインプロジェクトは構想で終わった。本院は、生体肝移植手術を受けた患者の死亡が相次いだことで経営難となり、開設後約1年で休院、破産したためである。

しかしその後残った施設は2017年、建築・インテリア部分はそのままだに、医療機器、サインなどを入れ替え、神戸大学医学部附属国際がん医療・研究センターとして生まれ変わった。2018年9月現在、筆者の設置したオブジェとレリーフは前オーナーのコンセプトを担ったまま現存している。

#### 【作品データ】

■設置年：2014年

■設置場所：兵庫県神戸市『医療法人社団 神戸国際フロンティアメディカルセンター』

『神戸大学医学部附属 国際がん医療・研究センター』2018年現在

■制作・設置：高崎 Art 製造 Project カロエ

■サイズ：モニュメント - H2750×W1670×D1650 (mm)

：レリーフ - H1245×W2000×D60 (mm)

■素材・仕上：モニュメント - スチールオイルペイント仕上

：レリーフ - スチールオイルペイント仕上、裏面蛍光色塗装仕上げ

## 4.2. 目的と条件

本モニュメントとレリーフの設置は空間に変化と彩りを与え、施設を活用するすべての人々の心の拠り所として存在することを目的とするものである。

オーナーからは、1) 10年間かけて完成するものである事、2) 約1000人の利用者が制作に関われる事、3) 10年間の日々の製作は、素人が担える事。という3つの条件が出された。これらについてオーナーの強い意向が反映されているため、提示された内容を以下に転記する<sup>3</sup>。

### 1) 10年間かけて完成するもの

「10年という単位」

移植を受けた患者さんはその後一生に渡って免疫抑制剤で治療を続け、自己が“他”である移植肝を拒絶してしまわないようにコントロールしていかなければなりません。病院とは一生のお付き合いになります。また、ドナーさんに対してもぜひ感謝の心を忘れずとともに歩んでほしいと思っています。それゆえに、5年10年15年20年というスパンで、手術を受けるときの「思い」を見返して励みにしていただいたり、次に移植を受ける患者さんに勇気を与えてくれるモ

ニュメントが必要でした。経年劣化が少ない材料、続けていける運用を考えました。

## 2) 利用者が制作に関われる

「患者さん参加型のモニュメント」と「成長するアート」

生体肝移植は健康なドナーさんの身体にメスを入れて肝臓の一部を切除し、患者さんに移植する医療です。それぞれの患者さんが、元気になったら何をしたいと思っているのか、ドナーさんに対してどのような思いがあるのか、言葉にさせていただき残していきたいと思ったのが最初のきっかけです。

肝移植手術の日を第二の誕生日と表現されることも多く、「新しい命の誕生日」を「モニュメントが完成に向かう過程」と「KIFMEC（神戸国際フロンティアメディカルセンター）の成長」にダブらせたいと考えました。

### 4.3. 『成長するモニュメント「思いの木」』について

#### 4.3.1. モニュメントイメージ

「成長」という言葉からまずイメージされるのは「樹」や「芽」などの植物的な形体であった（Fig.5）。さらに「思い」を「言葉に残す」ということから「七夕（Fig.6）」や「絵馬（Fig.7）」のイメージを加えていった。さらに、「ある角度から見ると言葉や絵が浮かび上がる」というコンセプトで筆者がデザインした、『ミツケルの樹～空海地（Fig.8）<sup>4</sup>』と、『コトバノミナモト／The Source of Japanese（Fig.9）<sup>5</sup>』をオーナーが気に入ったためこの形体を元にデザインを進めていった。

#### 4.3.2. 造形の仕組み

納品時が完成ではなく、その後10年にわたって「成長」ということは非常に困難な課題であった。そこで、モニュメントのベースを下地として設置し、そこに利用者が少しずつ手を加えていくという仕組みをデザインした。下地となる造形は単純で、複数のキューブを立体のX、Y、Zどの軸から見ても重ならないように配置し、立体視した時にできる入り組んだ形体と、平面視した時にできる単純な面の発見を楽しむものである（Fig.10）。

#### 4.3.3. モニュメントコンセプト

「健康や回復への願いを「樹」の成長に託す」

基本形体は25個のキューブによって構成される「樹形」である（Fig.11）。その姿は一見バラバラだが、垂直水平の多い建築空間内に「傾いた形状」によってアクセントを加え、さらにある場所から見ると一つの「面」が認識できるように計画した。そして、設置当初の白い樹形状から、利用者ひとりひとりが思いを綴る「葉」のカラーシート（Fig.12）をキューブ上に配置することによって、徐々に色づき成長していく。カラーシートを使用することで、利用者が制作に参加することを可能にした。さらにその年月の積み重ねが、各面に「命」の文字を形づくっていく（Fig.13）。約1000人の利用者が参加した10年後に、各面に文字を浮かび上がらせ葉を茂らせた「思いの木」は完成する。

#### 4.4. 『変化するレリーフ1 (Fig.14)』について

##### 4.4.1. レリーフコンセプト

成長するモニュメントに隣接するレリーフのため、それ自体も変化し空間に彩りを与える必要があった。そのためにレリーフそのものが発光したように壁面から浮かび上がるイメージをつくり、さらに院内の医師や利用者から提供される「写真」や「絵」を入れ替えられるような仕組みをつくる。形状はモニュメントとの調和を図るため、モニュメントのシルエットから形体の一部を取り出し、壁に定着したようなイメージの平面形状としてデザインする。大中小、複数のパネルによって構成し、壁面に対して広がり調和を生み出す (Fig.15)。

##### 4.4.2. 造形の仕組み

壁面から浮かび上がるイメージは、レリーフの裏面に黄、橙、黄緑の蛍光色塗装を施し、その反射色が壁面に映るようデザインすることで実現した (Fig.16)。「写真」や「絵」の出し入れに関しては、スチールで組んだレリーフ本体の上辺部を開閉可能な機構にし、そこから別フレームに入れた写真や絵を出し入れできるようにした (Fig.17)。

#### 4.5. 作品と設置環境との関係について

「利便性」の先にある「生死」を突き詰めていくと、そこに「心の拠り所」が必要になってくる。その役割を機能のない『思いの木』が担った。「資産価値や権威」という価値ではないアートが、なくてはならない存在として位置付けられた (Fig.18)。一方そこから派生して生まれた『変化するレリーフ1』は、中身を交換することで空間に変化を及ぼし、画像を提供する職員や利用者のコミュニケーションや展示による満足感を得るといふ、理解しやすいある種の「機能」を伴うことで、設置に対するハードルが下がった。このことは次の施設へのアート設置にも影響した。

#### 5. 事例2 『変化するレリーフ2 (Fig.19)』について

##### 5.1. 概要

鹿児島県鹿屋市に新設された総合医療施設でのレリーフデザインプロジェクトである。前述した『変化するレリーフ1』をオーナーが気に入ったため、そのイメージや造形の仕組みはそのままに当施設のための別のヴァリエーションとしてデザインした。設置場所は手術室の廊下、高さ2.5m、幅9mの壁面である。

設置時に設置予定壁面のサイズがデザイン時のサイズと異なっていたため、急遽現場でレイアウトを再構成しての設置となった。本デザインは複数枚のレリーフによって構成されているため、このような状況でもその効果を崩すことなく対応できた。

##### 【作品データ】

■設置年：2014年

■設置場所：鹿児島県鹿屋市『社会医療法人 鹿児島愛心会 大隅鹿屋病院』

■制作・設置：高崎 Art 製造 Project カロエ、株式会社アートココ

■サイズ：H1540×W4910×D80（mm）

■素材・仕上：スチールオイルペイント、裏面蛍光色塗装仕上げ

## 5.2. 目的と条件

アート設置計画は筆者の作品単体ではなく、病院全体を様々なアーティストの作品によって豊かな空間にしたいというオーナーと設計者の共通の目的から進められた。工芸的な作品や、従来型の絵画作品、また障害を持った子供たちの作品などが設置される中、1) 近くに流れる肝属川（きもつきがわ）の「水」のイメージ（Fig.20）、2) 建築空間に融合する形体、という2つの条件のもとデザインした。

## 5.3. レリーフコンセプト

写真の出し入れ方法、背面の蛍光塗装はそのまま踏襲し、場所に合わせた複数レリーフの構成と配色を変更した（Fig.21）。特に蛍光塗装は「水」のイメージという条件から青、緑を使用した（Fig.22）。

## 5.4. 作品と設置環境との関係について

場所に合わせた形体にデザインされているとはいえ、『変化するレリーフ1』と同じある必然性をもったコンセプトであるため、その機能から提案は理解されやすかった。これは『成長するモニュメント「思いの木」と変化するレリーフ1』を発案し設置したオーナーの意識が伝播し、場所を変えて派生したとも考えられる。しかし設置場所のサイズ変更が現場に入るまで提示されなかったことは、建築現場がアートをどのように考えているかの一つの事例といえるかもしれない。

## 6. 事例3 『土地の特徴を生かすレリーフ（Fig.23）』について

### 6.1. 概要

既存医療施設に増設する診療棟に設置するレリーフのデザインプロジェクトである。1階から3階までの吹き抜け、2階と3階の間の壁面部、高さ3m、幅8.3mへ設置した。レリーフ設置面に向かって1階から2階へのエスカレーターがあり、来院者は登り下りの中でレリーフに対する視点の変化を得ることができる。また三階からはレリーフを見下ろすことが出来る贅沢な鑑賞環境である。

#### 【作品データ】

■設置年：2015年

■設置場所：愛知県弥富市『JA 愛知厚生連 海南病院』

■制作・設置：OH プランニング、株式会社アートココ

■サイズ：H1925×W5675×D260（mm）

■素材・仕上：スチールオイルペイント、一部建材用カラーシート貼り仕上げ

## 6.2. 目的とイメージ

増築される施設内をより豊かな空間にしたいという目的は他の医療施設と共通である。施設近隣の風景である、「太陽の光に輝く木曾三川の水面 (Fig.24)」と、周辺に広がる田園から「濃尾平野に吹き渡る風に揺れる稲穂 (Fig.25)」をモチーフにすることで、施設が存在する場所の特徴を生かした。そしてその象徴となるアートをデザインすることで、アートを設置する必然性を高め、アート自体が施設の「アイデンティティ」をも象徴するようイメージをつくった。

## 6.3. コンセプト

モチーフである水面からは「連続する変化」を感じる形体を、稲穂と田からは「色」をそれぞれ具体的に造形化し、それぞれを自然のゆらぎとして感じられるよう調和させる。また全体は高位置への設置をしやすいするため、一体として制作するのではなく複数枚での構成とした。

## 6.4. 造形の仕組み

「ゆらぎ」を表現するため、一枚の板から連続して抽出できる緩やかな波型の連続形状をデザインした (Fig.26)。切り出した10枚の波型形状を縦に並べ1ユニットを構成し、さらに同じ波型形状の並べ方を変化させることで、A, B, C, D 四種のユニットをデザインした (Fig.27)。四種のユニットから A 3つ、B 3つ、C 2つ、D 2つの計10ユニットを使用し、その並べ方の順番と上下の配置を変化させることで全体に変化と調和をデザインした。一見すると同じ波型形状で構成されていることは確認が困難だが、同じであることで配置がずれながらも連続性を感じることができる。波型形状はランダムに配置したブリッジによって連結し、この表面に稲穂と水面をイメージした色を施した (Fig.28)。またこのブリッジの一部は壁面への設置部材として機能させた (Fig.29)。

## 6.5. 作品と設置環境との関係について

その施設の立地、環境などをモチーフに、アートを「象徴」「アイデンティティ」として表すという位置づけは、筆者にとっても役所などの公共施設や社屋新築などへの設置で数多く実施例 (Fig.30,31,32,33)<sup>6</sup>があり理解されやすい。「象徴」や「アイデンティティ」など形のないものを表すために、機能の伴わない純粋な色や形を与えることは、アートの代表的なあり方の一つであろう。

## 7. 事例4『実体感を消すレリーフ (Fig.34)』について

### 7.1. 概要

民間ではあるが市民病院のように地域に根付いた中核病院として新築された総合病院へのレリーフデザインプロジェクトである。設置場所は1階から2階までの吹き抜けになっている待合室の2階部分、高さ3.5m、幅24m (両側湾曲) の壁面である。対面は同じ幅で高さが2階までのガラス張り大採光部となっており、設置壁面までの距離は3.5mと高さ、幅に対して狭くなっている。

建築設計者が施設全体へ設定した「ネスレ（鳥の巣）ホスピタル」というコンセプトのもと、当初は、1）受付背面、2）受付柱、3）診察待合室の吹き抜け壁面という三箇所へ、鳥の巣をイメージさせるアートを設置するプロジェクトであった。しかし計画中盤でオーナーからの計画変更が指示され、ネスレホスピタルというコンセプトは事実上白紙になり、それに伴ってアート計画も縮小された。その結果、3）診察待合室の吹き抜け壁面へのレリーフ設置のみの実施となり、そのための新たなコンセプト、デザインを提案し、実施された。

#### 【作品データ】

■設置年：2017年

■設置場所：大阪府泉南市『医療法人晴心会 野上病院』

■制作・設置：OH プランニング、株式会社清水建設

■サイズ：H2670×W18000×D50（mm）

■素材・仕上：スチールオイルペイント、裏面蛍光色塗装仕上げ

## 7.2. 目的と条件

新たにたてられた目的は病院独自のものだけではなく、立地する泉南市の持つ「花笑み・せんなん (Fig.35)<sup>7</sup>」というシティブランドを強く意識し、広く市民に貢献する病院のイメージをつくることであった。そこで「花笑み・せんなん」のイメージカラーであるグラデーションをメインに使用し、形状はオーナーの好みの「花」をモチーフにするといった条件のもとデザインを進めていった。

## 7.3. イメージ

オーナーの好みの花である、「あじさい (Fig.36)」と「藤 (Fig.37)」などが舞い、待合室の利用者にその潤いと恵が降り注ぐ様を表現する。頭上診察室の入り口上部に設置さされることもあり、重苦しくない、あくまで軽やかで実体感を伴わない、不思議な現象のみが表現されたようなイメージをつくった。

## 7.4. コンセプト

「影に色をつける」ことによって虚像と実像のはざまで一瞬、視覚を惑わす危うい存在感が生まれる。鑑賞者が「みえる」と「みえない」こと、「ある」と「ない」こと、これらについて再認識することを目指した。

## 7.5. 造形の仕組み

設置場所は大採光部と距離が近いいためふんだんに太陽光が入り、通常の塗装や染料では経年劣化が懸念された。その為、逆にその太陽光を活用する表現を提案する必要がある。具体的には事例1、2でも活用したレリーフ背面に施した蛍光色塗装の反射によって「影に色をつける」効果をさらに進めた表現である。蛍光についてメーカーによれば、「蛍光は（主に紫外～可視光）のエネルギーを吸収（励起）し異なる特定波長の光（可視光）として発光するものでフォトルミネッセンス（光を与えたことによる発光・現象）の一種として知られる<sup>8</sup>。」さらに「通常の室

内灯にはあまり含まれていない紫外線により強く反応し、この紫外線は太陽光に多く含まれる<sup>9</sup>。」とのことであった。本設置場所はまさにその効果を表現するにふさわしい場所であった。

実際に存在させる形体はなるべく薄く、表面は設置壁面の色と同色仕上げにし、「図」と「地」の反転した形状を複合することによって「色の影」のみを認識できるようにデザインした。

## 7.6. 作品と設置環境との関係について

施設独自のコンセプトに基づく空間設定が途中で破棄され、『土地の特徴を生かすレリーフ』同様に立地場所を象徴するアートに変更されたことは、前記した6.5. のとおり理解しやすいことであった。また本レリーフは設置環境を活かし、『変化するレリーフ1、2』と同様の蛍光色塗装反射による空間表現がそれまで以上の成果となって表現できた。さらにその効果は、施設インテリアの間接照明計画を類似の表現に変更させるまでに影響した (Fig.38)。機能を除き純粹な現象のみを追求した本アートの存在が、「アートによって空間の雰囲気が決定される」ということを体現する事例となった。

筆者は2017年末、本造形技法によるさらなる表現を追求するため、新たな作品を制作し発表した (Fig.39)<sup>10</sup>。

## 8. まとめ

以上4つの事例について報告したが、通常、アートが設置された後、作者と当該施設が関わることはほとんどない。しかし『成長するモニュメント「思いの木」と変化するレリーフ1』を設置した医療施設については特別な関わりが生じたため記述する。

オーナーのアート設置に関しての強い意志と、当施設が開院1年で休院、破産したことがどう関係するかはわからない。少なくともアート設置がマイナスに働いたという情報は筆者の耳には入っていない。2017年9月、筆者は閉院後、新たなオーナーとなって新開設された施設へ赴きアートのその後を確認した。設置したモニュメントとレリーフは二作品ともそのままの状態が残っていた。そしてなぜ残っているのかを担当者に尋ねてみると、「現状では撤去する理由が見当たらない」という消極的な回答であった。しかしさらに筆者が本アートには「利用者が制作に参加し、10年で完成する」というコンセプトがある旨を説明すると、「コンセプトについては知らなかった、今後アートを活用していくという段階が来たら連絡する」という回答を得られた。取材から1年経ちその後の活用についての連絡はまだないが、2018年9月、当該施設のホームページを閲覧してみると、トップページの大きな四つの画像のうち一つに本アートの画像が使用されている (Fig.40)。このことは新施設も本アートに関してなんらかの意味を見出したということに他ならない。4事例中、最もアート設置に関しての意義を見出し、熱意をもっていた施設が破産したことは残念でならない。しかし、オーナーが変わってもアートが残っている現状を踏まえてみると、今後このような意識を持ったオーナーが増え医療施設へ「生死」の先にある「心の拠り所」としてのアートの必然性が増えていくことであろう。

## [参考文献・URL]

- シンロイヒ株式会社『昼光蛍光顔料の特性と利用』 グラビア研究会 第一回勉強会 2014.12.11資料
- 下山 肇 著『人と社会の活性化を促すアートについて～幼児教育現場での一事例』 実践女子大学美学美術史学27号 2013年
- 下山 肇 著『先端医療施設内オブジェのデザイン～利用者とともに10年かけて完成する「コト」のデザイン』 環境芸術学会第15回大会概要集 2014年
- 下山 肇 著『円と方一育み—市を象徴する屋外モニュメントのデザイン』 環境芸術学会第15回大会概要集 2014年
- 下山 肇 著『円と方による造形の研究1』 実践女子大学美学美術史学27号 2015年
- 下山 肇 著『K病院エントランスレリーフ』 環境芸術学会誌「環境芸術」15号 -2 2016年
- 下山 肇 著『かげのいろ／The colors of the shadow』 環境芸術学会第18回大会概要集 2017年
- 公益財団法人 日本交通文化協会 HP『1%フォー・アート活動』 <http://jptca.org/publicart/one-percent-for-arts/> 2018年9月閲覧
- 『医療法人社団 神戸国際フロンティアメディカルセンター』 HP <https://web.archive.org/web/20151030180429/http://www.kifmec.com/> 2015年10月30日時点のアーカイブ
- 『神戸大学医学部附属 国際がん医療・研究センター』 HP <http://www.med.kobe-u.ac.jp/icccr/> 2018年9月閲覧
- 『社会医療法人鹿児島愛心会大隅鹿屋病院』 HP <http://www.kanoya-aishinkai.com/index.html> 2018年9月閲覧
- 『JA 愛知厚生連 海南病院』 <https://www.kainan.jaaikosei.or.jp/> 2018年9月閲覧
- 泉南市 HP『シティブランド創出事業「花笑み・せんなんプロジェクト」』 <http://www.city.sennan.lg.jp/shisei/annai/1458795184199.html> 2018年9月閲覧
- 『医療法人晴心会 野上病院』 HP <http://www.nogami.or.jp/index.html> 2018年9月閲覧

## [図版]

- Fig. 1～3、8～18、21～23、16～32 撮影・作成 下山 肇
- Fig. 4、19、33、34 撮影 加藤 健
- Fig. 5 GAHAG | 著作権フリー写真・イラスト素材集 <http://gahag.net/000312-tree-landscape/>
- Fig. 6 フリー素材.com <https://free-materials.com/%E7%9F%AD%E5%86%8A%EF%BC%88%E4%B8%83%E5%A4%95%EF%BC%8902/>
- Fig. 7 フリー素材.com <https://free-materials.com/%E7%B5%B5%E9%A6%AC%E3%83%BB%E7%A5%9E%E7%A4%BE%E3%81%A7%E7%A5%88%E9%A1%9801/>
- Fig.20 ウィキペディア「肝属川」 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%82%9D%E5%B1%9E%E5%B7%9D>
- Fig.24 ウィキペディア「木曾三川」 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%A8%E6%9B%BD%E4%B8%89%E5%B7%9D>
- Fig.25 Cafi Net つながる情報技術 <http://japanism.info/2016-09-free-photo23-35.html>
- Fig.33 建築主：川崎重工業 株式会社 航空宇宙カンパニー  
建築設計：実施設計 株式会社 大林組 基本設計 株式会社 山下設計  
施工：株式会社 大林組  
エトランスガーデンデザイン：下山 肇  
企画：株式会社 アートココ
- Fig.35 泉南市「花笑みせんなんブランド」ロゴマークの使用に関する取扱要綱（H27.3.9制定）」

- Fig.36 フリー素材タウン [http://sozai.yutorilife.com/n\\_ajisai.html](http://sozai.yutorilife.com/n_ajisai.html)  
 Fig.37 フリー素材タウン [http://sozai.yutorilife.com/h\\_fuji01.html](http://sozai.yutorilife.com/h_fuji01.html)  
 Fig.38 医療法人晴心会 野上病院 HP <http://www.nogami.or.jp/index.html>  
 Fig.39 撮影 高橋 綾  
 Fig.40 神戸大学医学部附属 国際がん医療・研究センターHP <http://www.med.kobe-u.ac.jp/iccr/>

[協力 (敬称略順不同)]

株式会社 アートココ  
 シンロイヒ 株式会社

註

- 1 ここでいう公共空間とは、単に行政や地方自治体などが管轄する空間というだけではなく、不特定多数の一般市民が利用する空間という位置づけとした。
- 2 公益財団法人日本交通文化協会 HP 『1%フォー・アート活動』より引用
- 3 オーナーである病院のモニュメント担当であった山田貴子医師よりいただいた文章
- 4 『ミツケルの樹～空海地』竜ヶ崎幼稚園 Kindergarten Museum (茨城県) 2012年  
 投影されたときに平面的に充填される立方体をベースに、ある角度から見たときにだけ、文字や絵が浮かび上がる仕組みを持った立体としてデザインした。バラバラな“部分”が、一つの絵に見えたとき、作品はパズルのピースがぴったりはまるような、秩序があらわれる時のワクワクする感じをあたえ、感性を刺激する知的な遊具となる。
- 5 『コトバノミナモト／The Source of Japanese』アートコンペ「神々への捧げもの」最優秀賞 2009年  
 神々をたたえ、あがめる時、また、日常生活の様々な場面で私たちは「言葉」を使いその思いを表す。そんな日本語の言葉、すべての直音（音声の聞こえのまとまり）を一回だけ使って、覚えやすい歌の形に整理された「いろは歌」をモチーフに、言葉が湧き出る前の混沌とした言葉の「源」をイメージして作品をデザインした。  
 結晶化されたキューブのなかに、見る角度によって「言葉」のかけらが見え隠れする。
- 6 『加東市庁舎オブジェ』2014年（兵庫県）サイズ:H3022×W849×D980 (mm)、素材:SUS304バイブレーション及び鏡面磨き仕上げ、一部塗装仕上  
 『広島赤十字看護専門学校記念碑』2014年（広島県）サイズ:H800×W1800×D400 (mm)、素材:稲田石、叩き仕上、一部本磨き仕上、ステンレスプレート埋込貼付  
 『岡山市水道局サインモニュメント』2017年（岡山県）サイズ:H1330×W6800×D2825 (mm)、素材:既存万成石、サイン部、本磨き仕上、文字彫込  
 『川崎重工業岐阜工場新統合ビルエントランスガーデン』2017年（岐阜県）サイズ:W100×D40 (m)、素材:御影石、グランドカバー、常緑樹、落葉樹、低木、生垣など
- 7 シティブランド創出事業「花笑み・せんなんプロジェクト」によれば以下の通りである。「市民に身近な存在である「花」を私たちの誇りとし、花の持つ「彩:華やかさ・人目を引く魅力」というポジティブイメージを市と重ね合わせ、「花笑み・せんなん」に集約して本市に新たな価値を付加し、他地域に対する優位性を確立していく」泉南市 HP より
- 8 シンロイヒ株式会社『昼光蛍光顔料の特性と利用』グラビア研究会 第一回勉強会 2014.12.11の資料より引用
- 9 シンロイヒ株式会社営業部による説明より 2018年7月筆者取材

10 『かげのいろ／The colors of the shadow』 環境芸術学会第18回大会作品発表展 オリエギャラリー（東京都）2017年

サイズ：W380×H455×D70（1ユニット） 素材・仕上げ：スチールオイルペイント仕上げ、一部蛍光色塗装仕上げ

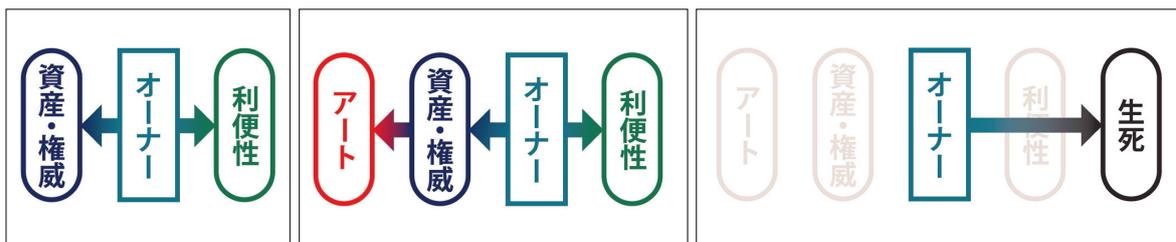


Fig.1 オーナーが求める異なる方向性の価値、「利便性」と「資産・権威」  
 Fig.2 「資産・権威」が得られるものとしての「アート」の位置付  
 Fig.3 「アート」から縁遠い「利便性」の先にある「生死」の世界としての医療施設



Fig.4 『成長するモニュメント「思いの木」』



Fig.5 モニュメントイメージ「木」



Fig.6 モニュメントイメージ「七夕」



Fig.7 モニュメントイメージ「絵馬」



Fig.8 『ミツケルノ樹〜空海地』 2012年

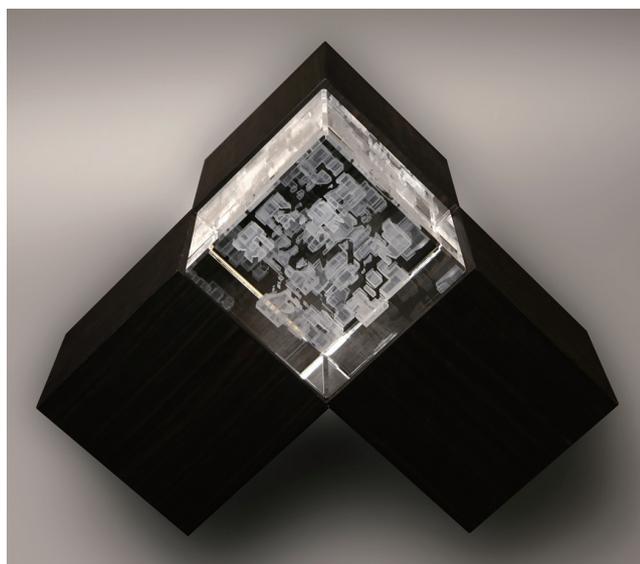


Fig.9 『コトバノミナモト／The Source of Japanese』 2009年

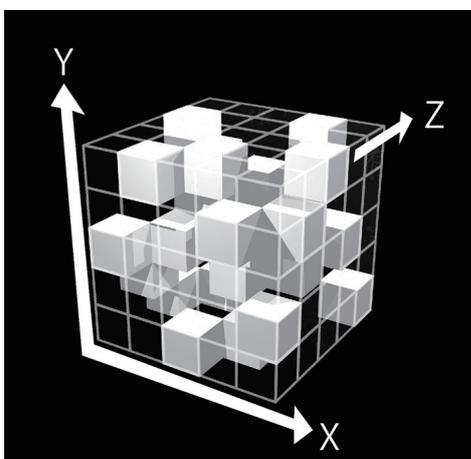


Fig.10 造形の仕組み



Fig.11 3D プリントモデル (S=1/20)



Fig.12 実際に貼られた「葉」のカラーシート

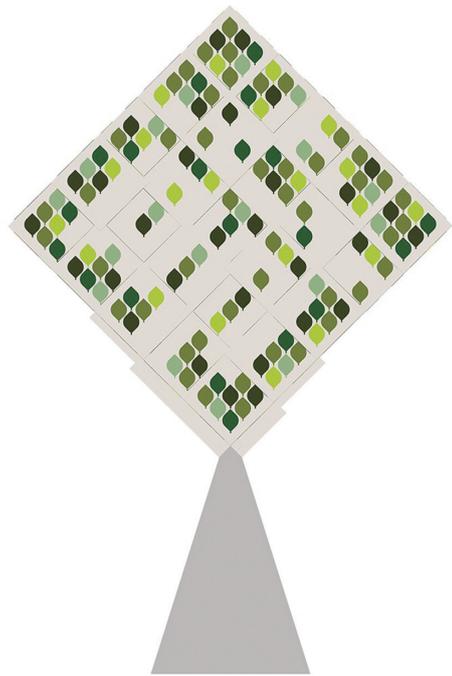


Fig.13 浮かび上がる「命」の文字



Fig.14 『変化するレリーフ1』



Fig.15 イメージスケッチ

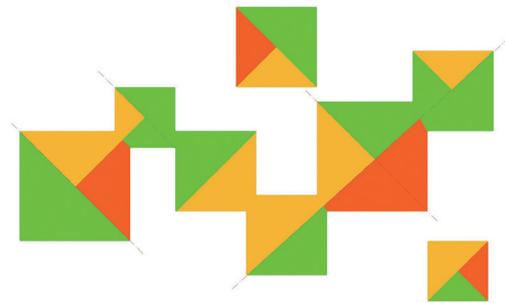


Fig.16 背面の蛍光色塗装配色計画

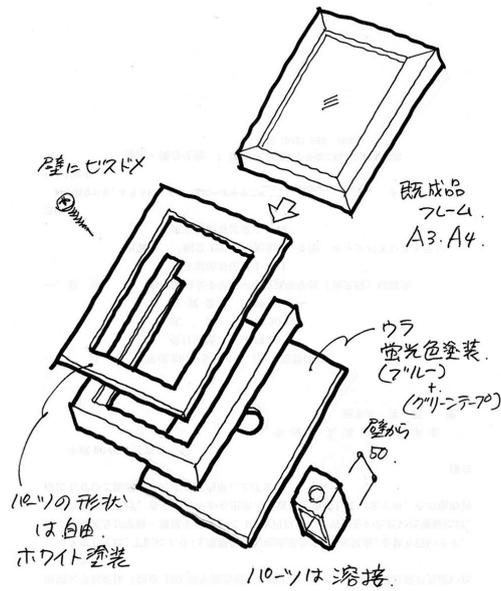


Fig.17 入れ替えの仕組み

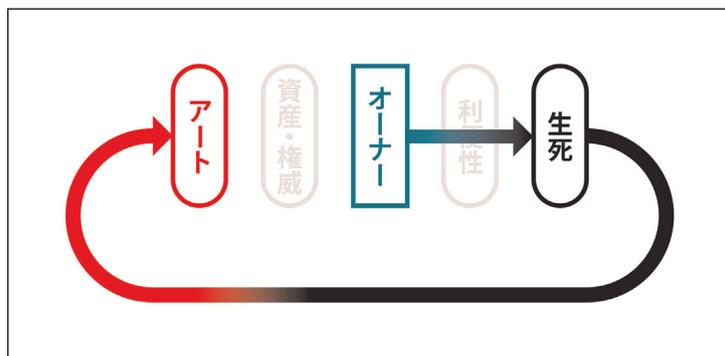


Fig.18 「生死」の世界を突き詰めることで「心の拠り所」としての  
アートの必然性につながる



Fig.19 『変化するレリーフ2』

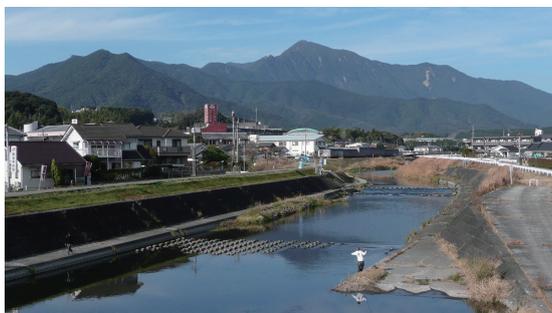


Fig.20 レリーフイメージ「肝属川」



Fig.21 イメージスケッチ

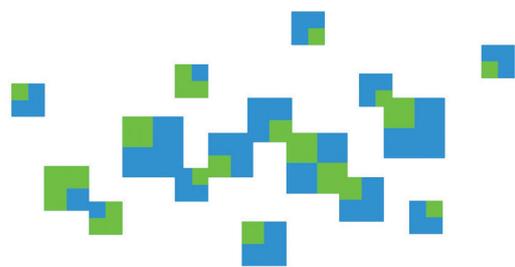


Fig.22 背面の蛍光色塗装配色計画



Fig.23 『土地の特徴を生かすレリーフ』 2015年



Fig.24 レリーフイメージ「木曾三川」



Fig.25 レリーフイメージ「稲穂」

パーツ板取り図

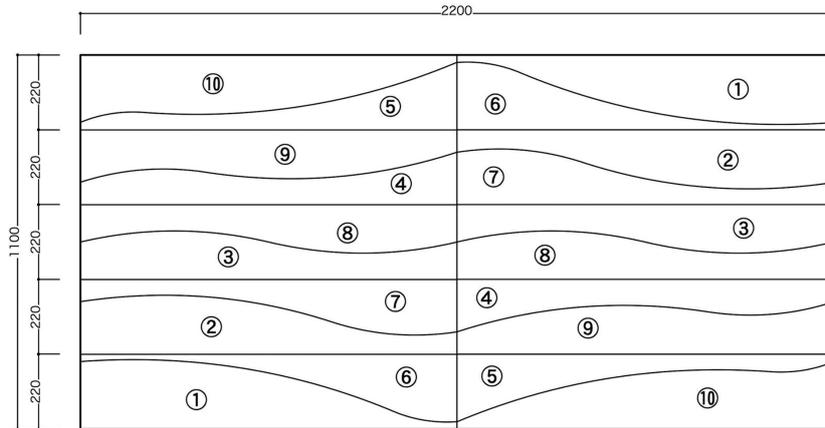


Fig.26 既製サイズの鉄板から無駄のない板取り

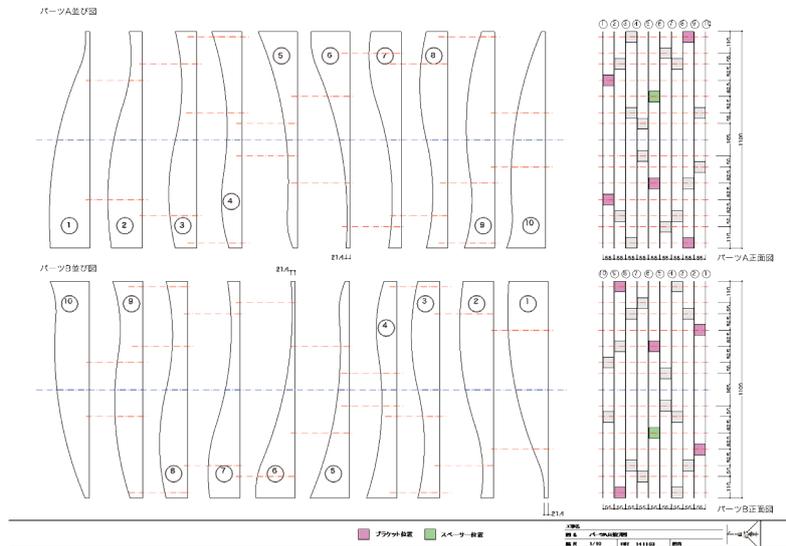
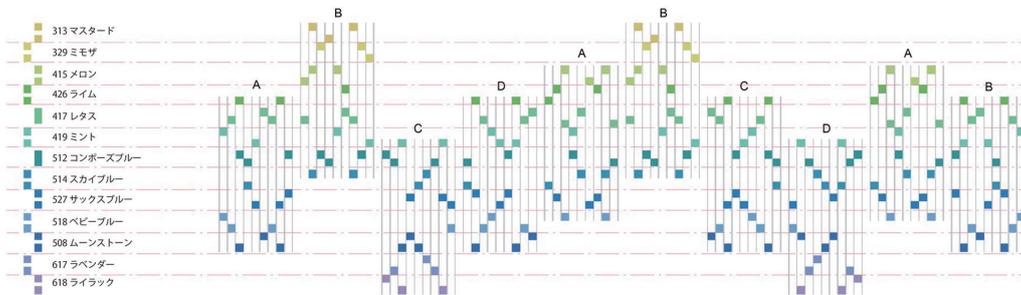


Fig.27 ユニット図 (A, B)

海南病院壁面レリーフカラー指定図



※壁面取付金物部以外、表裏張りのごと

Fig.28 カラー指定図

油南病院 緊急出口用シャッター取付断面図

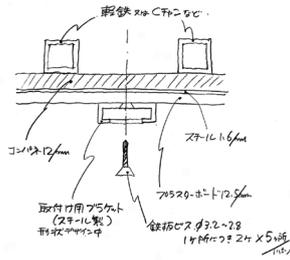


Fig.29 壁面取り付け断面図



Fig.30 『加東市庁舎オブジェ』 2014年



Fig.31 『広島赤十字看護専門学校記念碑』 2014年



Fig.32 『岡山市水道局サインモニュメント』 2017年

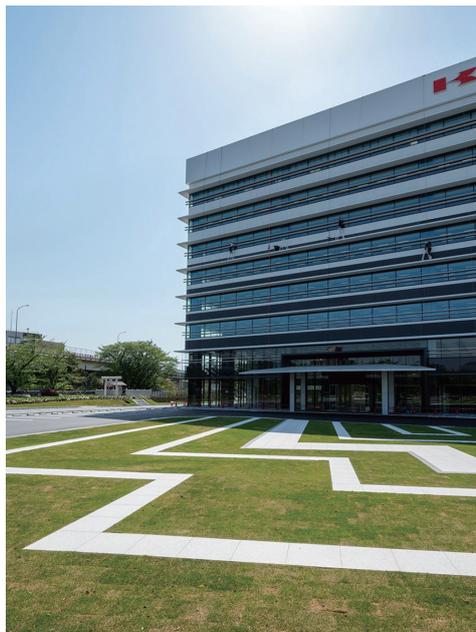


Fig.33 『川崎重工業岐阜工場新統合ビル エントランスガーデン』 2017年



Fig.34 『実体感を消すレリーフ』 2017年



Fig.35 泉南市シティブランド  
ロゴマーク



Fig.36 レリーフイメージ「あじさい」



Fig.37 レリーフイメージ「藤」



Fig.38 施設インテリア



Fig.39 『かげのいろ／The colors of the shadow』 展示風景 オリエギャラリー（東京都）2017年



Fig.40 神戸大学医学部附属 国際がん医療・研究センターHPのトップページ